

はじめに

本書は『英文解体新書——構造と論理を読み解く英文解釈』、『英文解体新書 2——シャーロック・ホームズから始める英文解釈』に続く、英文解体新書シリーズの第3弾に当たります。そもそも、このシリーズは大学受験で英語の語彙や文法、読解力を身につけても、まだそれだけでは原書や新聞・雑誌などを自由に読みこなすことはできないという考えから、大学受験英語と原書の読解の橋渡しの役割を持たせることを意図して書き始めたものです。せっかく受験参考書が読解力の土台となる基礎を提供してくれているのだから、その土台を身につけて大学に入った学習者たちを同じようなやり方でもう一步先へと導くような参考書があってもいいじゃないかという思いがあったためです。幸い、前著2作品は、一般の基準から見れば相当難しい英文を扱ったものであるにもかかわらず、予想以上に多くの方に手に取っていただくことができました。大学受験に出ないような難しいものを取り上げても読者には響かない、という声もある中、本シリーズが多くの人から受け入れられたという事実は私にとって大変励みになるものでした。

解体新書はそもそもの難度設定が高いので、前著2冊のいずれか、あるいは両方ともをしっかりとこなしたという人は、すでに自力で英語の文章を読み解いていくだけの力をかなりの程度、身につけていると思われます。一方で、原書や記事などを多少読んだからといって全ての文章中でハイレベルな事項が次から次へと出てくるわけではなく、学んだことがしっかりと身についているか、まだはつきりとは分らないと感じている人もいるでしょう。また、本シリーズに取り組んでおらずとも、これから本格的に原書に挑戦していこうと考えていて、自分にそれだけの力があるかをチェックしたいと思っている人もいるかもしれません。そこで、『解体新書 1・2』で扱っているレベルの事項の理解度を確認できるような、ドリル形式の実践編があってもよいのではないかと考えました。それがこの『英文解体新書 3——実戦で研ぎ澄ます解釈の技』の執筆の動機です。

はじめに

以上の経緯から、本書の構成においては読者ができるだけ前提知識を持たない状態で英文に向き合える形を目指しました。このため、『解体新書 1』のように表現や文法構造のタイプごとに英文を配列する形も、また、『解体新書 2』のように特定の作家の作品から集中的に素材英文を採用する形もありません。肩慣らし用に設けた序章を除くと、各章の英文の難度や使用されている表現のタイプなどは基本的にランダムで、その代わり、内容のジャンルに基づいて分類するという形を採用しました。また、最終章の第 5 章は短編のエッセイを丸ごと読み切るものになっているので、原書の読書体験により近い感覚を味わえるのではないかと思います。なお、『解体新書 1・2』では英文の冒頭に難度を示す★がありましたが、最初にこれを見ると身構えてしまうこともあるかと思い、本書では解説の冒頭で示すように工夫してあります。次々に迫ってくる構造も難度も予想できない英文に徒手空拳で立ち向かうというイメージから、本書の副題にはあえて「実践」ではなく「実戦」という言葉を入れました。

こういった、あくまで実践演習に主眼を置いた本であるため、『解体新書 1・2』の復習や確認テストとして使えるのはもちろんのこと、前著 2 冊を未読の人であっても、自身の実力を確認するとともに弱点をあぶりだすための指標として使用することが可能です。それぞれの例題にはできるだけ『解体新書 1・2』の類題の情報を入れたので、それらと照らし合わせながら取り組むことによって、より高い効果が期待できるでしょう。なお、本書の中にちりばめた 8 つのコラムでは、解体新書シリーズに影響を与えた参考書や、英文解釈書がこれまでに辿ってきた進化の過程についても触れました。読者のみなさんにとっては、英文とのバトルの合間のよい気分転換になるのではないかと思います。

英文解体新書の物語は 2018 年の秋に受け取った一通のメールから始まりました。それまで全く面識のなかった研究社のベテラン編集者から「英文解釈の本をうちで書いてくれないか」という依頼を突如として受けたのです。直前に生死をさまよう大病を患っていて、苦しい状況にあった中で舞い込んだ大きなチャンスに、私は二つ返事で飛びつき、まさに乾坤一擲の思いで本シリーズの第 1 作を書き上げました。結果、それは私の初の単著として、そしてまた代表作として、以降、現在にいたるまでに関わった書籍や連載の大きな土台となっています。自分にとって特別な意味を持つ

はじめに

作品をこうしてシリーズ化し、第3弾まで続けることができたのは大変ありがたいことです。本シリーズの生みの親と言っても過言ではない元研究社編集部津田正さんはもちろんのこと、津田さんが定年退職された後、編集担当を引きついでくださった青木奈都美さん、また、それをサポートしてくださった星野龍さんのご尽力がなかったら、これはかなわなかったことでしょう。同時に、分担して原稿を細かくチェックしてくださった研究社編集部の方々、そして、大学、大学院時代の友人であり、下書き原稿から詳細に読んで助言をしてくれた慶應義塾普通部教諭の簗野智紀先生にも大いに助けていただきました。この場を借りて、皆様に心より御礼申し上げます。

2025年5月11日

北村一真

略語一覧

C＝補語

O＝目的語

S＝主語

V＝述語動詞

目 次

はじめに	iii
序章 ウォームアップ	I
第1章 人文系の文章	23
コラム (1) 『英文解釈教室』の魅力	97
コラム (2) 『思考訓練の場としての英文解釈』 第1～3集	98
第2章 現代社会に関する文章	99
コラム (3) 今につながる一冊『頻出英語長文解法 40 講』	131
コラム (4) 往年の大学入試英文の強烈な難度	132
第3章 サイエンスにまつわる文章	133
コラム (5) 伝説的参考書の復刊	160

第4章 フィクションの文章 ————— 161

コラム (6) 伊藤和夫以降の英文解釈の参考書の流れ 217

第5章 エッセイを読み切る

ジョージ・オーウェル「あなたと原爆」————— 219

コラム (7) 最初の洋書とその影響 251

コラム (8) お勧めの洋書 252

主要参考文献 254

引用文献 256

索 引 260

(1) It might be possible that in order to understand and appreciate the value of Diogenes as a philosopher, one may have to be a Cynic oneself or at least have certain Cynic tendencies.

(2) How can someone whose psychological predispositions and whose upbringing incline him to blindly accept all social norms and to deify the Establishment and the status quo, and who, as in the case of patriotic enthusiasts and religious zealots, cannot find fulfillment in life except as part of a group, discover any value in a man like Diogenes, who, partly on account of his character and the circumstances of his life, and partly because of certain philosophical influences, felt compelled to wage a relentless war against the human world that surrounded him, and found his fulfillment only in the shelter of his self-proclaimed independence?

(Luis E. Navia (2005): *Diogenes the Cynic*)

〔文脈〕 古代ギリシャの哲学者シノベのディオゲネスをテーマにした書籍からの抜粋です。ディオゲネスはキュニコス派 (Cynic) と呼ばれる一派の思想を極限まで追求した存在で、「狂えるソクラテス」と評されました。

〔語法・構文〕

- **appreciate...**: 「...を深く理解する」
- **Cynic**: 「キュニコス派、犬儒学派の(人)」, cynical 「ひねくれた、冷笑的な」の語源になった言葉です。
- **predisposition**: 「気質、性格」
- **upbringing**: 「生い立ち、育ち」
- **incline** △ **to** 不定詞: 「△に...する傾向をもたせる、...するようしむける」
- **deify**: 「神格化する」
- **the status quo**: 「現状」
- **zealot**: 「熱狂者、狂信者」
- **wage a war against...**: 「...に戦い(戦争)をしかける」
- **relentless**: 「容赦のない、冷酷な」
- **self-proclaimed...**: 「自称...、自分で主張している...」